

# 図書館情報学とコンピュータ

—社会のコミュニケーション基盤としての図書館—

木内 公一郎

## 1. はじめに 公開講座「文化としてのコンピュータ」

「文化としてのコンピュータ」というテーマの下にもっとも適当なテーマは何かを考えた。そもそも文化とは何か。Yahoo 辞書<sup>1</sup>によれば「1. 人間の生活様式の全体。人がみずからの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体。それぞれの民族・地域・社会に固有の文化があり、学習によって伝習されるとともに、相互の交流によって発展してきた。カルチャー。『日本の一』『東西の一の交流』」

2. 1のうち、特に、哲学・芸術・科学・宗教などの精神的活動、およびその所産。物質的所産は文明とよび、文化と区別される」とある。

「人類がみずからの手で築き上げてきた有形・無形の成果の総体」そして「哲学・芸術・科学・宗教などの精神的活動、およびその所産」という部分に注目すると人間の創造する力とその結果が文化であるという解釈をすることができる。コンピュータも人間の創造力とその成果であり、それをいかに利用して人間の創造力に貢献できるのかが問われるということだろう。そして人間がいかに使いこなすことができるのか。それがこの「文化としてコンピュータ」の主要なテーマであると考えられる。

話しの筋を図書館に戻す。図書館にはコンピュータは不可欠になっているが、コンピュータを利用して何ができるのか。それを追求しようと思う。そのためには図書館の本質を明らかにしなければならない。

まず図書館とは何か。最近は教育における読書の効用が見直されている。読書を行うことが人間形成に不可欠であるという認識が広まっている。そのため図書館が子ども達の読書用資料を提供し、支援することが求められている。

また社会における情報化の進展は人間が生きていく上で、情報の獲得が

---

1. <http://dic.yahoo.co.jp>

必要であるという認識を強くしている。その情報源のひとつとして図書館が見直されている。

この社会における図書館の本質は何か。そして社会のなかでどのように位置付けられるのかを考えて見よう。

つぎに図書館の知的な基盤となっている図書館情報学という学問にも注目する。

その特質とともに情報化が進展する社会にどのようなフィードフォワードができるのか、考察してみたい。

ところで図書館という言葉からどのようなイメージをもつであろうか。

市民の方にもっとも身近な公共図書館を題材にして考えて見よう。本棚が何列も並ぶ書庫、子どもたちが絵本に夢中になっている児童室、本や雑誌を貸してくれる所、インターネットやデータベースの検索、学習室や閲覧室、知的な財産の宝庫、誰かとのふれあいも求めていく場所など、その利用目的によって異なったイメージを持っていることであろう。最近は開放的で快適な図書館も増えてきて、良いイメージで語られることも多くなった。しかし、その本質は理解されていないと考えさせられることもある。身近になり過ぎて、イメージが単純であることが気になることもある。

## 2. 図書館の外環境

図書館が置かれている現状を考えて見よう。やはり今回のテーマとも関係のあるインターネット、デジタル化を切り口にして考えて見よう。総務省の通信利用動向調査によれば平成16年のインターネット利用者数は7,948万人、人口普及率では62.3%という数値が出ている。この数値は年々増加している。このような数字は社会の情報化が進んでいることを示している。

「情報（化）」という言葉どのような事柄を連想するのであろうか。「情報社会論」という授業で学生に尋ねたことがある。「コンピュータ」「インターネット」「携帯電話」「個人情報」「テレビ」「新聞」「ニュース」「取り扱いに注意が必要」というコメントもあった。「情報」に対する警戒感が出てきていることは少々気になる。

これは最近のインターネットや携帯電話を利用した犯罪の増加傾向を反映しているものと見られる。

インターネットとは世界中の大小様々なコンピュータネットワークをTCP-IPプロトコルという通信規約で連結した巨大なコンピュータネットワークのことである。

インターネットには次のような特徴がある。だれでも発信できる。情報の更新が簡単である。文書、動画、静止画、音声など様々な形式の情報がある。発信者が特定できない場合がある。常にアクセスできるとは限らない。情報の正確性に疑問がある。情報源が明らかではない。著作権侵害の恐れがある。以上のようにメリットとデメリットが混在しているのがインターネットに対する一定の評価ではないだろうか。

図書とインターネットの違いはどこにあるのであろうか。図書は著者が原稿を書き、出版者では内容を検討し、出版しても売れるか、内容は正当なものかを判断を行なう。

編集者は原稿を校正し、チェックした上ではじめて出版される。インターネットは情報発信者が情報を作成し完成すると直ちに公開することができる。そのプロセスには校正やチェックが介入することはない。それは虚偽情報や公序良俗に反するような情報も簡単に公開できるということも意味する。<sup>2</sup>

### 3. 情報格差

このような背景をもとに悪質な情報、品質の悪い情報などが増加している。例えばインターネットの掲示板に他人をひぼう中傷する書き込みがされる。コンピュータウイルスがネットワークやコンピュータを混乱させる。さらに情報格差が大きくなっていること示すデータが存在する。前述の平成16年度総務省の通信利用動向調査によればインターネット利用率において格差が大きくなっているという。表1をみると、例えば年収200万から400万未満の世帯の利用率は15年59.6%から16年55.8%に減少。逆に年収600万から800万未満の利用率は65.8%から68.8%へ上昇し、二つの年収世帯差は15年で6.2%、16年で13%に拡大している。格差や不平等を是正し、情報

---

2. しかし一般的に図書はある程度売れる保障がないと出版されることはない。よって目立たないが地道な大切な調査研究をインターネットで公開することも可能である。

や資料の入手に関して、機会を平等に与えるということが課題となっている。

表1 デジタルデバイド<sup>3</sup>

年収	インターネット利用率	
	平成15年末	平成16年末
200万～400万円未満	59.6%	55.8%
400万～600万円未満	65.8%	68.8%

健全な市民社会を守っていくには社会に様々なコミュニケーションが円滑に進むことが大切であると考えます。

#### 4. 図書館とコミュニケーション

我々人間が身を置いているいかなる社会状況においても、基本的な社会過程はコミュニケーションである。あらゆる状況において、我々は意志(目的)、指示、助言、情報、態度、意見、気持ち等を伝達する<sup>4</sup>。

そもそもコミュニケーションとは何か。

「大辞泉」によれば「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語・文字・身振りなどを媒介として行われる。」と定義されている。

メディア<sup>5</sup>としてはテレビ、ラジオ、新聞、週刊誌、インターネット等が機能している。民主主義社会においてはこれらが平等に利用できるような環境を整えておいてはじめて、市民は生活に必要な情報を得ることができる。そして自分たちの力で生活を向上させ、自己実現をすることができる。

図書館は3000年以上の歴史がある。その起源は記録の保管所としての図書館としては古代アッシリア、中国におよぶ。長い歴史のなかで貴重な資料を時間と空間を超え、守り抜き、そのときどきの権力者や市民に対して、提供してきた実績がある。その知識を利用することで思想、文学、科学技術が発展してきたと言えるだろう。社会的なコミュニケーション機関とし

---

3. 平成16年度総務省通信利用動向調査より抜粋して作成

4. ブライアン・C. ヴィッカーリー、アリーナ・ヴィッカーリー著、津田良成、上田修一監訳「情報学の理論と実際」勁草書房、1995年、P22

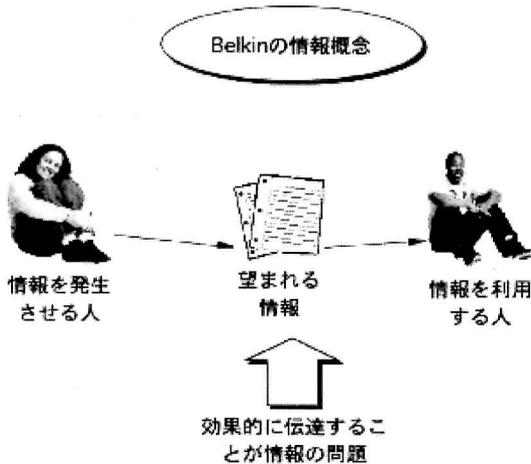
5. ここでは情報を伝達する「入れ物」という定義をしておく。

ての図書館の重要性はここにある。

前述のコミュニケーションの問題にもどって、コミュニケーションにおいて最も大切なことはなんであろうか。Belkinによれば情報の問題は情報を発生させる人と、これを利用する人の間に望まれる情報を効果的に伝達することにあると考えている<sup>6</sup>。

図1はその概念を表現したものである。

図1 Belkin の情報概念



一方的に情報の送信者が受信者に対して一方的に情報を送りつけるのは、健全なコミュニケーションは成立しない。また情報の受信者が要求している情報でなければ、やはりコミュニケーションは成立しない。

そしていかに効果的に送るのか。受信者は①いつ②どこで③どのようなメディアで受信することを望んでいるのか。事前に送信者が理解し、配慮しておく必要がある。

Belkinの概念を言い換えれば、「**情報を送る側は情報を受け取る側が望む情報およびメディア、そして受け取る際の状況を考えて伝達することが社会的なコミュニケーションのルールである**」これを社会コミュニケーション

---

6. Belkin, N.J. Progress in documentation: information concepts for information science. Journal of Documentation. Vol.34, p.55-85, 1978

ンの基本ルールと名付けることにする。

コミュニケーションといっても、一方的に送るのではなく、相手の立場、置かれている状況、理解力、関心、興味も勘案することが肝要である。

この社会コミュニケーションの基本ルールと図書館がどのような関係があるのであろうか。それを次の章で考察してみたい。

## 5. 図書館とは何か

まず始めに図書館を社会のなかで正確に定義をする。

「サービス対象集団に、物としての、または書誌的および知的なアクセスを提供するために組織化された資料のコレクションで、当該集団の情報ニーズに関するサービスとプログラムを提供するように 練されたスタッフをもっているもの」(ALA図書館情報学辞典)

つまり図書館の要素には第一に利用者、第二に組織化されたコレクション、第三に専門的な訓練を受けた職員(司書)がいることが不可欠である。さらにこれに建物として図書館が加わる。そしてこれのどれか一つ欠けてしまうと機能としての図書館は成立しない。

図 2 図書館を構成する要素(1)

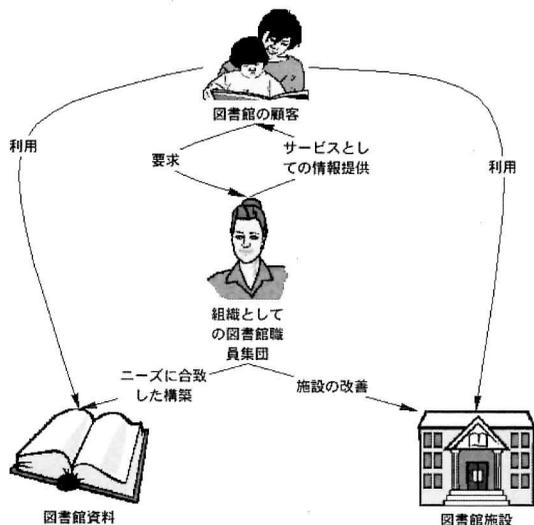


図2 図書館を構成する要素(1)は4つの要素の関係を簡潔に表現したものである。図書館の利用者(図では顧客と表現されている)は自ら司書の支援無しに資料を探し利用する場合もあれば、司書を通じて、資料や情報を要求し、提供を受けることもある。また資料を利用せずに図書館の施設、例えばコンピュータや閲覧室を利用する場合も想定される。

図書館司書は単独ではなく集団として、顧客たる利用者の要求に応じ、資料や情報を提供し、利用者のニーズを図書館資料の構成に反映させる。また施設や設備の改善を進める。4つの要素はこのように密着した関係にあるが、起点は顧客たる利用者にあることがポイントである。

図3 図書館を構成する要素(2)

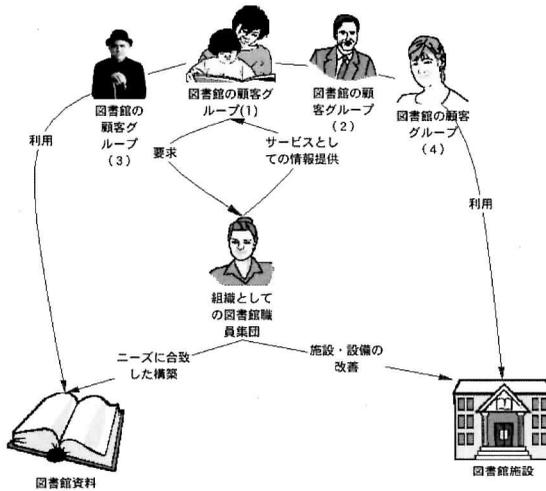


図2は利用者の集団を分類した上で表現している。図書館の利用者は利用する資料の種類や図書館を利用する時間帯、図書館へニーズ毎に異なった特色をもっている。そのセグメント毎にいくつかのグループに分類することができる。

例として司書としての勤務経験から東京都太田区洗足池図書館における利用者のセグメントを説明する。利用者グループは①乳幼児と母親②年配の方③小中学高校生④大学生⑤ビジネスマン、OLなど職業をもつ社会人の5つのグループに分類することができる。例えば乳幼児と母親は午前中に

来館し、お昼直前に帰宅する。おそらく昼食を自宅でとるためと思われる。利用する資料は絵本など児童書、育児や料理など家庭に密着した資料が多い。年配の方は午前中から夕方にかけて平均して来館する。大変学習意欲も旺盛で、専門的な内容の質問が多い。小中高校生は下校時間帯に集中して来館し、漫画や児童書、小説などを借りていく。夏休みなどの長期休暇中は宿題への対応が多くなる。社会人は夕方5時以降に来館し、小説やCDなどを借りていくことが多い。または土曜日、日曜日は閲覧室で仕事や資格・検定試験などの学習をしていることが多い。このように公共図書館はそれぞれのニーズに対応し、そうすることが存在意義であると考えられる。

前述の「**情報を送る側は情報を受け取る側が望む情報およびメディア、そして受け取る際の状況を考えて伝達することが社会的なコミュニケーションのルールである**」という原則にもどって考えてみると、図書館は利用者が置かれている状況をよく理解する必要がある。そしてどのような時、場所、メディアで図書館からの情報提供を受けたいのかをよく理解し分析しておく必要があるだろう。

## 6. 図書館の利用の特徴<sup>7</sup>

利用者からみると図書館はどのような機能が便利であると感じるのであろうか。

- ①多数の本、雑誌がある。そしてそれらを無料で利用できる。
- ②様々な観点から著述された図書が多数所蔵されている。
- ③コンピュータや閲覧室、セミナールームを自由に利用できる。
- ④訓練された司書から図書や雑誌の情報提供をうけることができる。

これによって、市民は多数の図書や雑誌を読むことで知識を増やし、学習が進む。セミナールームで開講される様々な講座を受講することで教養を身に付けることができる。さらに学校、生活、仕事でおきる問題を解決し、知的にも精神的にも豊かな生活を送ることができる。このような知的にも成熟した市民からの要求がさらに図書館の資料、職員スタッフを成長

---

7. 開学二十周年記念事業委員会編. 知の銀河系第1集. 本と情報の世界. 図書館情報大学, 1998年, p105-128

させることにつながっていく。図書館の構成する要素に利用者が入っていることはこのような理由があるからである。

## 7. 図書館の自由

公共図書館がだれでも自由に利用できるのは「図書館法」という法律で規定されているためである。さらに図書館界では1979年「図書館に自由に関する宣言」という文書を公表し、紆余曲折はあるものの現在にいたるまで遵守している。図書館界にとって大切な理念のひとつである。以下の文章はその抜粋である。

「図書館は、基本的人権のひとつとして知る自由をもつ国民に、資料と施設を提供することを、もっとも重要な任務とする」

「日本国憲法は主権が国民に存するとの原理にもとづいており、この民主権の原理を維持し発展させるためには、国民ひとりひとりが思想・意見を自由に発表し交換すること、すなわち表現の自由の保障が不可欠である。知る自由は、表現の送り手に対して保障されるべき自由と表裏一体をなすものであり、知る自由の保障があってこそ表現の自由は成立する。」

「すべての国民はいつでも必要な資料を入手し、利用する権利をもつ」

「すべての国民は図書館利用に公平な権利をもっており、人種、信条、性別、年齢その他の条件等によって差別されない」

「資料収集の自由—国民の知る自由を保障する機関としてあらゆる資料要求に応える。」

「資料収集方針に基づく収集—多様な、対立する意見のある問題はそれぞれの観点に立つ資料を幅広く収集する。著者の思想的、宗教的、党派的立場にとらわれて、その著作を排除しない」

「資料提供の自由—すべての図書館資料は原則として国民が自由に利用できる。正当な理由がないかぎり書架から撤去し、廃棄しない。資料の保存は将来の利用に備えるため保存の責任を負う。一時的な社会的要請や圧力によって廃棄されることはない。」

「利用者の秘密を守る—本を読むことはその人のプライバシーに関わることである。それを外部にはもらさない。」

「図書館はすべての検閲に反対する。—検閲は権力が国民の思想 言論

の自由を抑圧する手段として常用してきたものであって国民の知る自由を基盤とする民主主義とはあいれない。」

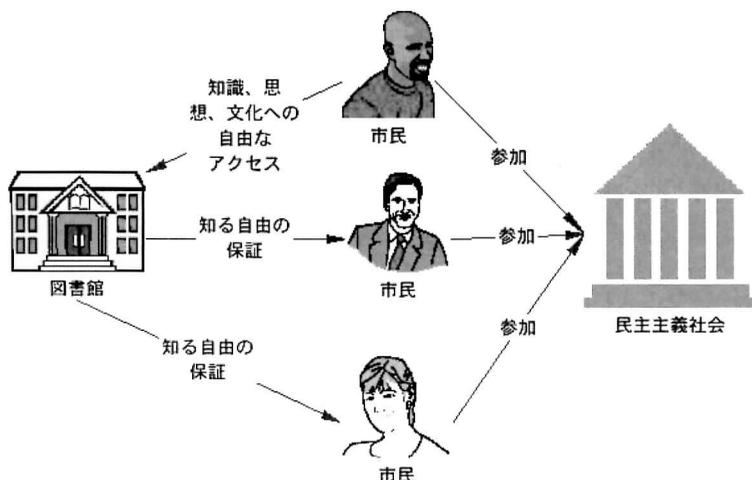
「図書館の自由を団結して守る」

図書館の自由とは図書館が好き勝手に自由に運営してよいということではない。市民の「知る自由」を保障するために図書館は資料提供の自由、利用の自由、利用者の秘密を守り、検閲に反対し、団結するということがある。

## 8. 政治参加と民主主義を守る図書館

2005年9月総選挙が行なわれた。有権者は政党や政治家を評価する際に必要な情報はどこから獲得しているだろうか。新聞、テレビ、雑誌、選挙広報から入手していると思う。これらの情報は等しく市民に届けられねばならない。一部のマスコミや書店で購入される本や雑誌だけでは不平等をもたらしてしまう。図書館も無料で、なおかつ大量で様々な観点から著述された本、雑誌、新聞等を提供し、市民に判断材料を提供する。次の図は民主主義社会を守る図書館を表現したものである。

図 4 知る自由と図書館



市民は無料で図書館の資料にアクセスすることができる。憲法で保障された「知る自由」を行使しすることを意味する。図書館は逆にこれを保障する。図書館では利用者の求めに応じて多様な資料を提供する。そして図書館における調査研究・読書を通じて市民は自己実現をし、人格的な成長を遂げて行く。そして民主主義社会に積極的参加し、支える。これは政治参加という社会コミュニケーションへの貢献をしていることになる。コンピュータと図書館のことを論じる以前に図書館が果たすべき大切な役割である。コミュニケーション基盤としての図書館が果たすもっと基本的で大切な役割である。

なお図書館には設置目的や設置母体によって6種類に分類することができる。学校図書館、大学図書館、公共図書館、専門図書館、国立国会図書館である。

学校図書館とは小中高等学校や養護学校に設置される図書館である。教育や学習活動の支援、児童生徒の教養を高めるという目的をもっている。

大学図書館とは国公立大学・短期大学に設置される図書館である。本来は大学の教育研究活動を支援することが目的である。しかし最近では地域や一般社会への情報発信、特に研究成果をインターネット上に発信することが要求されている。

公共図書館とは地方自治体に設置される図書館である。様々なニーズをもった市民へサービスを第一の目的としている。

国立国会図書館は国会議員の立法活動を支援している。また国内で出版される資料をすべて保存する義務を負い、図書館の図書館として資料の貸出しをはじめとして、さまざまな支援事業も行なっている。

専門図書館とは特定の分野の資料を収集し提供している図書館である。企業や各種団体に設置されており、一般には非公開の図書館もある。

これらの図書館も「図書館の自由」を守る義務をもっていることは言うまでもない。

## 9. 図書館のサービス

この大切な役割を果たすために図書館では大きく分けて2つのサービスが提供されている。

直接サービス：貸出、予約、レファレンスサービス、児童サービス（児童書、読み聞かせ、ブックトーク、紙芝居、人形劇、パネルシアターなど）、アウトリーチサービス（来館できない人たちへのサービス）

間接サービス：資料の選択、受入、分類、目録、保存、廃棄、保存、施設、設備

貸出はもっとも基本的なサービスとして認知されている。直接サービスのなかで認知度が低いのがレファレンスサービスである。これは利用者の方がそれぞれ必要な情報や資料の探索を支援するサービスである。「個人情報保護法の全文を見たい。」「昔尋ねた美術館の連絡先を知りたい」「議会の議事録を閲覧したい」など資料や情報探しのお手伝いをするサービスである。司書は辞典、事典、ハンドブック、書誌などの参考図書を調査し、データベースを検索する。様々な情報源から利用者の方が探しているものを見つけ出す。また回答が困難な質問によっては専門家や他専門機関を紹介することもあれば、情報の探し方を教授することもある。この業務はデータベースや資料に関する知識、幅広い分野の基礎知識、利用者の方の要求を知るためのインタビューなどの技術が要求されるサービスであり、図書館のなかではもっとも専門的なサービスである。

データベースサービスは最近漸く公共図書館でも実施されるようになってきた。上田情報ライブラリーにおいて、日経テレコン21、信毎データベース、聞蔵が提供されている。これらは有料で契約を結ぶことで利用できるもので、商用データベースという。情報の質は高く、目的が決まっていればインターネットよりも使いやすい。

一番見えにくいのが間接サービスであると思われる。図書館に所蔵されている資料を通常、図書館資料という。図書館資料になるまでには、多くの出版物から選択しなければならない。これを選書と言う。選書は資料収集方針という選択の方針と基準を示した文書に基づき、司書が選択していく。選択した資料は購入または寄贈という形で財産または消耗品として受

入れる。受け入れた資料は目録（本のタイトル、著者、版、出版地、出版者、年、物理的な記録）を作成する。目録は「日本目録規則」という規則に基づいて、作成される。例えば本の書名は本のどの部分から採用するか（本の部分によって書名が異なっている場合もある）、著者が複数いる場合、どのように記述するかなど（著者の他に翻訳者や編者もいる場合もある）詳細な規則である。司書はこの規則に基づいて本の目録を取る。最近では本以外に視聴覚資料（CD、DVD）や電子資料（CD-ROMやインターネット上の資料）も扱えるように改訂が繰り返されている。司書の仕事のなかでも専門的な仕事である。この目録規則は日本独自に作成されている。しかし基本的なところは世界標準に準拠している。これを国際標準書誌記述（ISBD）と言う。これによって日本の目録と外国の図書館で作成された目録同士が相互交換する。

さらに目録と同時に分類（あらゆる知識、学問を記号や数字で表現したもの）をつける。一般的には「日本十進分類法」という表が利用されている。

日本十進分類法は数字の0から9を組み合わせて、知識全体を分類したものである。

まず知識を0から9の一桁で10区分する。（例：2は「歴史」）これを類目表と言う。さら類を10区分する。（例：21は「日本史」）これを綱目表と言う。そしてさらに綱を10区分する。これを要目表という。（例：211は「北海道地方」）。要目表を細分化した表を細目表と言っている。（例：210.42は「鎌倉時代」）この細目表をもって資料に分類記号を付与していく。司書は本の主題つまりテーマを分析し、日本十進分類法の細目表を参照しながら分類番号を付与していく。この作業も目録とやらんで専門的な訓練が必要な業務である。

これらの直接、間接サービスが機能してはじめて、社会での図書館の機能を果たすことができる。今紹介してきたサービスはもっとも基本的な業務である。しかし図書館もこれだけでは情報化に対応できなくなっている。ので、様々な形態の図書館をつくり、新しいサービスを始めている。

## 10. 新しい図書館

社会的なコミュニケーションを促進するために図書館は新たな可能性を求めて変化しつつある。その例をイギリスとアメリカに求めて説明する。

### 1) ロンドンのタワー・ハムレット地区にある図書館<sup>8</sup>

2002年に「Idea Store」という名称の図書館ができた。以前はこの地域の利用者登録率は15%と極端に低かった。ちなみにイギリスの利用者登録率の全国平均は58%である。この地区の市民にアンケート調査を実施したところ、この地区の市民の24%は生涯学習へのニーズを持っていることがわかった。

タワー・ハムレット地区では図書館のあり方を再検討し、古い図書館を改装して、「Idea Store」という名称の情報センターとして再出発した。

「週7日、71時間開館。休憩室やロビーでは勉強も読書もできる。ホールにいたるところにおかれたインターネットにつながるコンピュータも利用できる」

来館者は3倍に増え、貸出しは65%増加した。

「Idea Store」のホームページ<sup>9</sup>を見ると、図書館の建物とは思えないガラスばりの斬新なデザインである。書庫も明るい色になっている。カフェも設置され、図書館とは思えない施設となっている。「Tower Record」「HMV」などの音楽専門店の雰囲気似ている。これらの工夫によって入館しやすい雰囲気づくりに成功したことはいうまでもない。またLearning Ladder（学習の階段）という名称の生涯学習プログラムも多数開講されている。

図書館資料は図書・雑誌の他にCD、DVDなどが多数貸出し可能となっている。スタッフは生涯教育や図書館の経験者が配置されている。その他、求人情報の検索など市民のさまざまなニーズに適合したサービスが提供されている。

現在3館がこのような「アイデアストア」としてオープンしており、4

---

8. United Kingdom. Department for Culture, Media and sport. Framework for the future: Libraries, Learning and Information in the Next Decade.2003

9. <http://www.ideastore.co.uk/index/PID/1>

館が計画・開発途中である。

「情報を送る側は情報を受け取る側が望む情報およびメディア、そして受け取る際の状況を考えて伝達することが社会的なコミュニケーションのルールである」という原則からするとそのとおりの改善をしていることがよく理解できる。

アイデアストアはその点で施設、コンピュータ環境などを改善し、学習や様々なメディアを提供することでコミュニケーション機関としての役割をはたせるようになったと言えるであろう。

## 2) ニューヨークパブリックライブラリー<sup>10</sup>

ニューヨーク市全域カバーする巨大な公共図書館である。全89館の中には地域図書館および学術図書館やビジネス、芸術などの専門図書館を抱える。公共図書館といってもニューヨーク市から資金援助と寄付で成り立っている独立の法人である。2004年の年次報告書<sup>11</sup>によると以下のような規模の図書館である。

表2 ニューヨークパブリックライブラリーの蔵書冊数

	蔵書冊数
研究図書館	43,333,453 冊
地域図書館	6,943,674 冊

利用者はニューヨーク市民のほか、外国人でも利用可能なオープンな図書館である。サービスも貸出、レファレンスサービスの他、学習情報、求人情報、地域の情報など幅広く提供している。

菅谷氏の著書<sup>12</sup>によれば、2001年9月11日の同時多発テロの際、ニューヨーク公共図書館はすぐに行動を起こした。事件の翌日には専用のウェブサイトを立て上げた。そこでは病院、警察などの連絡先、世界貿易センタービルに入っていた金融機関の一覧、公共交通機関の運行状況、献血、寄付、ボランティアなどの連絡先をいち早く提供した。事件にショックを受けた人向けのカウンセリング情報、中東やイスラム文化を理解するための推薦図書リストを掲載した。このようなことができたのは地域の情報を普段か

10. <http://www.nypl.org/>

11. New York Public Library 2004 Annual Report

12. 菅谷明子「未来をつくる図書館」岩波書店 2003年（岩波新書新赤版837）

ら提供し、続けていたという実績があったためであると言われている。

学術図書館の一つであるScience Industry Business Library (SIBL：科学産業ビジネス図書館)は科学とビジネス情報の提供を専門とする図書館である。広告、金融、化学、コンピュータ、経営、特許、商標、マーケティングなどの資料やデータベースをそろえている。サービスは文献や情報提供、講座、ビジネスカウンセリング、スペースレンタル、ネットワーク接続サービスなど起業やビジネスの環境整備をしている。

これらはニューヨークパブリックライブラリーの一例であるが、「図書館に行けばなんとかなる」という意識が市民にも定着している。日本の公共図書館では資料の提供が中心ではあるが、生活や仕事に必要な情報であればすぐに提供するというところが、日本と米英の図書館との大きな違いであろう。

また、Idea Store のように図書館をブランドとして確立しているところは斬新であり、見習うべき点であると思われる。

## 11. 情報リテラシー支援サービス

情報リテラシーとは個人が独力で自分にとって必要な情報を探し、評価を行ない、まとめた上で、文書やコンピュータで表現する能力のことである。公共図書館では「情報検索講習会」「情報の探し方講習会」という名称の講座が開催されるようになってきている。先日東京都立中央図書館を訪ねたところ、蔵書検索システムの講習会、さらに自然科学のフロアでは「癌に関する本」の探し方講習会も開催されていた。上田情報情報ライブラリーでもたびたび開催されている。このサービスの背景には情報過多や低品質な情報の氾濫のなかで自分にとって必要な情報をいかに効率的に探すことが一人一人に要求されるようになってきていること。さらにこのような能力をもっているのは司書という専門家であることが少しずつ認知されてきたということであろう。

ここまで図書館の中心に述べてきたが、「学問としての図書館情報学」を紹介する。

## 12. 図書館情報学

図書館情報学の原則は「図書館の現場でおきていることの問題解決」である。図書館の現場でおきる問題を研究している。その成果を再び現場に反映させることが目的である。研究の担い手は大学にいる研究者（教員）または図書館員であることが多い。実践的な性格をもつ学問である。

「図書館情報学」とは図書館学と情報学という本来別に発展してきた学問が融合した学問の体系をいう。

図書館学は19世紀末から欧米の公共図書館発達に併せて発展を遂げた。資料の整理・保管・提供などの技術が必要とされ、図書館学校も開設された。

一方、情報学は科学や技術に必要な情報の流通という観点から研究されてきた。第2次世界大戦以降はコンピュータを利用したデータベースの構築や検索の理論や技術の研究が急速に進展した。これは米ソ冷戦の影響で、アメリカが国家として科学技術、特に軍事技術の発展に力を入れ、そのなかで科学技術情報の効率的な蓄積と利用が目指されたからである。

やがて図書館学にもコンピュータを利用した図書館データベースの構築が検討・導入されはじめる。さらに近年のインターネットの普及に伴う情報化の進展が両者を融合させた。情報の収集・組織化・蓄積・提供という観点からすると両者は共通点も多い。融合したのは自然な流れであったと言える。

研究手法としては社会調査法（アンケートやインタビュー）や統計学が採用されることが多い。例えば「浦安市立図書館はなぜ質の高いサービスができるのか」というリサーチクエスチョンを設定したとする。それを実際に確認するために職員に対する聞き取り調査を実施する。だれがリーダーなのか。複数の職員にインタビューすることで中心的な職員が判明する。さらにモデル化して他の図書館に適用するということが行なわれる。

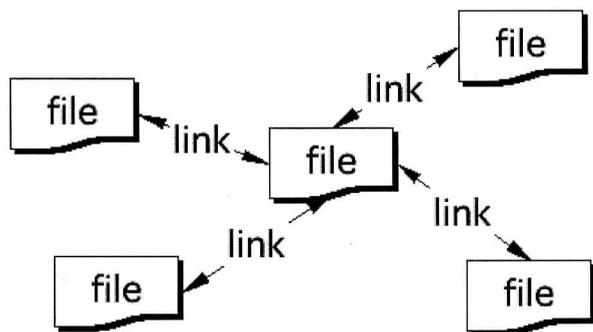
また、図書館に関係する法律、政治、歴史、社会との関連を追及する研究も多数行なわれている。政治との関連性を探る研究では地方議会における図書館に関する議員の質問を分析し、党派毎の図書館への意識を探ることも研究として実施されている。その他分野は以下の通りである。

社会や組織内のコミュニケーションの問題—例えば企業の情報システムも研究されている。

情報検索技術やデータベースの開発—最近はテキストだけでなく、画像や動画を蓄積し、検索することが可能なデータベースも開発されている。また多言語にわたる検索システムも研究されている。例えば日本語で中国語データベースを検索し、結果を日本語に翻訳して返すことも実用化されつつある。

具体的な開発だけでなく情報についての新しい概念を生み出すことも図書館情報学の大切な役割である。

図5 Memex System



例えば図5のMEMEX（ミミックス）システム。これは1945年にアメリカのVannevar Bush という科学者が構想したシステムである。自分の探したい文書ファイルを順に探すのではなく自由自在にファイル間を検索できる仕組みである。現在のインターネットのハイパーリンクの原型となった概念である。このような知的情報処理モデルを創造することも大切な役割である。

### 13. 図書館情報学の特徴

図書館情報学の特徴をまとめると以下のように表現される。

- ①社会における情報全般のあり方を研究している。
- ②「情報」イコール「インターネット」「コンピュータ」ではない。あくまでも手段、環境として捉えている。
- ③技術の進歩だけでは社会の発展には結びつかない。どのように利用するかを追求している。
- ④図書館の現場における問題解決

### 14. 結論

文化とは人間の創造力とその成果であるという定義に戻ると、どのような結論を導きだすことができるだろうか。人間の基本的な社会過程はコミュニケーションである。このコミュニケーションが正常に機能していることが社会の正常な成立ちに必要である。そして文化の発展には人間の創造力を助けるコミュニケーション、特に「**情報を送る側は情報を受け取る側が望む情報およびメディア、そして受け取る際の状況を考えて伝達すること**」が重要である。創造するということは先人が伝えてきた知識総体を理解し、受け入ることから始まるからである。その知識の保存庫としての図書館はそのコミュニケーション過程に多に貢献してきた。

今後図書館が文化の創造に貢献していくためにはより新しい発想が必要であろう。情報格差を解消し、良質なコミュニケーションを促進する場としての図書館という位置付けをすると様々な発想が可能になる。情報の受け取り方はひとり一人異なっている。そのためには資料中心の機関から、人間が生活し創造していくために必要な情報提供を行なう機関へ変化することがポイントである。また、情報を受け取りやすい環境づくりも求められている。それはIdea Store やニューヨークパブリックライブラリーが証明している。

図書館情報学ではコンピュータ・インターネットとは手段であり、環境であるという基本認識に立っている。データベースのような応用技術の開発とともに、Memexのような知的情報処理モデルを創造していることも重要であろう。今後も社会の様々な側面での貢献が要求されるであろうが、

人間の生活、特に知的創造への支援というところに研究の中心が移行していくことが期待される。

#### 15. 最後に -2004年7月の新潟県三条市豪雨災害からの教訓-

この惨事では9名もの犠牲者を出している。問題点として市から避難勧告が市民に対して十分に伝わらなかったことが原因とされている。

市は広報車を出し、避難が必要な地区に連絡したと主張していたが、広報車の拡声器からの呼び掛けは雨音にかき消され、避難対象ではない地区に間違えて連絡をするなど、適切な避難勧告ができなかったと言われている。これも一種の情報格差である。

このような悲劇から思うことは**社会コミュニケーションの基本ルール「情報を送る側は情報を受け取る側が望む情報およびメディア、そして受け取る際の状況を考えて伝達すること」**が正確に理解され、実行されていればこのようなことは防げたのではないかと思うのである。このようなことを聞くたびに情報や伝達という行為そのものへ理解が必要であると痛感する。図書館情報学は災害情報の伝達も研究の範囲にある。この分野の専門家として、もっとその成果を社会に伝えていかなければと考える。現場の図書館はこのような緊急情報の提供はしていないが、情報の特性や理解を進めるために一層の努力が必要ではないだろうか。(了)

#### 参考文献

- 藤野幸雄他「図書館情報学入門」有斐閣 1997年（有斐閣アルマ）  
植松貞夫他編「図書館概論」樹村房 2005年（新・図書館学シリーズ1）  
菅谷明子「未来をつくる図書館」岩波書店 2003年（岩波新書新赤版837）  
吉田政幸「図書館情報学の課題と展望」勉誠出版 2001年（図書館・情報学メディア双書11）  
日本図書館協会「図書館の自由に関する宣言」1979年

---

13. 読売新聞東京版朝刊2004年8月24日33面